

## 行動主義と意識の問題

園 原 太 郎

行動主義が、現代の心理学体系の中で、極めて重要な位置を占めていることは、敢えてここで指摘する必要もないであろう。ここで行動主義と呼ぶのは、学習の事態において、刺激と有機体の反応とを客観的に測定しようことの重要性を強調するアメリカの心理学者のとなっている心理学に対する基本的態度を指している。科学的認識の客観的公共性を心理学においても強く要請することの人々は、心理学の理論構成の基礎事実として、客観的に記述測定できる刺激―反応の対応関係を最も重視し、心的過程は行動からの推論によって説明しようというのである。行動の説明は刺激と反応の連合法則を基礎としてなされるものが多く、従って行動主義者は同時に殆んど連合主義者である。しかし、その理論は人によって夫々異なり、定着した唯一の行動理論あるいは行動主義理論というものは、今日まだない。トルマン、ガスリ、ハル、スキナアらの名が、ワトソンのラディカルな行動主義主張を現代にまで洗練してきた代表的心理学者としてよくあげられるが (M. H. Marx and W. A. Hilix: Systems and theories in psychology, 1963, p. 155)、これらの人々の理論乃至基本構想も各々主張を異にして、独自の立場を發展してきた。例えば、トルマンは、自から行動主義の立場に立つものと強く主張しつつ他の人々のように行動を刺激―反応の分子論的 (molecular) 連合として扱うのを排し、環境に対する適応的活動としての行動の全体的な (molar) 特性——目的性——を重視し、認知過程、記号学習を行動における中心的なものとして扱った。刺激―反応間の連合ではなく、刺激と記号ゲントルト間の連合を問題とし、むしろレヴィンやブルンスウィックに近い立場にたっていた。これに対しハルは、刺激―反応間の

結合を学習の中心的なものとし、この結合に働く強化の機能の基底に要求低下なる仮説的過程を置いて、極めて sophisticated された理論体系をたてることに力めた。ガスリーは刺激-反応の結合を同時連合のみで説明しようとし、その立場は最も純粹に連合論的である。条件づけられた行動に含まれる運動が刺激を生じ、刺激複合を変容させることが行動の複雑化を来すとする。スキナーは強化を極めて重視するが、ハルの如くその基底に仮説的生理的過程を置く理論化を排し、刺激と反応との間の連合の強化というよりは、自発的 (Operant) 反応と強化との間の連合が主たる関心のように見える。しかも経験的記述的に強化の事実を積み上げ、斯る経験的知見の早急な一般化を警戒し、その徹底したポジティヴィズムは有機体自身の内部活動を問題にせず、empty organism の語に値する極端な外面主義 (peripheralism) をとっている。このように代表的とされる人々についてみても、その考えかたは著しく異なっており、寧ろ、新しい行動主義はこれらの異論間の論争を通じて発展して来、発展しつつあるといべきであろう。メルトンが一九五〇年の心理学年報で「過去二〇年間の実験的、理論的發展はトルマンとハルとの対立理論の影響の下に進展した」(A. W. Melton. Learning. Annual Review of Psychology. Vol. 1, 1950, p. 9) と述べている如く、行動主義的研究の中における学説的相剋は、むしろ互いに欠を補って行動の行動主義的解明に資して来た。これらの理論の相違点は細部に至っては極めて末梢的な場合もあるけれども、最も大きな論点は、学習におけるパブロフの問題とソーンダイクの問題とをいかに理論的に統一するかという点にあるといえる。パブロフに従えば学習は刺激代替であり、ソーンダイクによれば反応代替である。即ち前者においては条件づけの反復により同じ反応に対し新しい刺激が記号としての機能をもちに至ることが学習であり、後者においては同じ状況に於て試行錯誤により無効連合が消失し有効連合が新反応として定着することが学習である。刺激の代替か反応の代替かということと共に、その機制において単なる接近連合か反応の強化かという問題が含まれる。この一見背反してみえる事実にどういう統一的な説明を与えるかという点で、接近連合から試行錯誤を誘導して強化を重視しない立場、強化を基として条件づけはその副産物と見

る立場、或いは両者を媒介的に統一しようとする立場などの主張の相違があり、更に学習においてこのような刺激・反応の結合関係を中心とみるか、刺激乃至状況の意味変化、認知構造の変化を中心とみるかなどの相違によって、多様な学説的対立を示してきたのである。従って行動主義とよばれるものは一つの理論的立場ではなく、これらの人々の心理学に対する態度とみるべきであろう。

然らば何が行動主義の態度の特色であろうか。前述の如く、この人々は心理学においても科学的な客観的公共的な認識を強く要請している。しかしこの態度は、心理学が客観的な科学であるためには当然のことで、ワトソンの行動主義主張が、過去の内観心理学からの脱却を企図したという歴史的基盤を除いては、今日敢えて行動主義と特に呼ぶ必要もない心理学の基本的方法的立場であろう。行動主義によって心理学の客観化は著しく進められた。しかし心理学において客観的立場をとるものがすべて行動主義だとはいえないのである。感覚、知覚の領域では、客観的な方法論をとりながら、行動主義とは自他ともに考えていない研究者も多いのである。

行動主義は確かに方法に於て客観的である。それは今日心理学という科学に値するからである。しかしそれを行動主義として特色づけるのは、心的過程を行動から推論するという基本的態度であり、その根本に於て意識を意図的に回避してきたという態度にあるとできよう。行動主義的研究が主として動物実験をもととして行なわれてきたことも、実験の便宜さという事情の外に、この意識回避の態度の現われと見ることも強弁ではあるまい。

マウラアは、内観主義の失敗に伴うフラストレーションと憤懣とが、行動主義という新運動を発生せしめたという表現を用いている(O. H. Mowrer: Learning theories and the symbolic processes. 1960, p. 252)。この外傷的経験に意識の概念が結合しており、この傷は未だに癒えず、意識は多くの人々にとって行動的科學への脅威を意味するという人もある(J. Nuttin: Consciousness, behavior, and personality. Psych. Rev. 1955, 62, p. 349)。従って今日行動の基礎の上に纏った科学を發展せしめるのに成功した心理学者の意識への否定的態度は、意識についてのいわば実験を初

めつつある神経外科学者を当惑させるのである (A. E. Fessard: Mechanisms of nervous integration and conscious experience, in *brain mechanisms and consciousness*, C. C. Thomas, 1954, p. 201)。

これらの引用にも見られるように、行動主義的研究の潮流には、意識的現象を意図的に回避してきた強い底流があった。それがマウラアやナッチンのようなフラストレーションや外傷による反動形成か否かはさておき、心理学の客観化という方法的要請の外に、行動主義を特色づける色彩となってきたと考えられる。そしてそのことが、アメリカにおける行動主義的心理学の夥しい実験研究と sophisticate された諸々の理論にもかかわらず、果して人々が心理学に期待する人間の精神活動の理解に、応えられるものなのかという危惧を、専門外の人々にはもとより、心理学者殊に臨床心理学の領域の人々の中にも抱かせる因となっていると思われる。

行動主義が反撥した内観心理学は、周知の如く諸々の難点を露呈した。殊に内観法が思考、認知、学習過程に用いられるにつれ、決定的な困難に到達した。意識的経験の記述自体が困難であり、認知、思考過程を意識的経験で定義することを疑わしめた。訓練や強化によって実効は上るのに過程の意識は却って消失し、従って意識的過程が働くでなく意識されない実効をもつ過程の重要性が明白になってきた。内観法が最も効果を發揮した感覚、知覚の領域でも、例えば二音の高さを比較する場合、前音のイメージ乃至意識的現出がないことが分って見れば、二音の意識的比較などいうのは無意味となる。オズグッド (C. E. Osgood: *Method and theory in experimental psychology*, 1953, p. 248-9) は思考研究における内観法の欠陥を要約して、(一)内観的データは検証できぬ。(二)内観以外の重要なデータが無視される。(三)言語報告は思考の鏡映ではない。(四)思考の結果は観察されても、思考過程自身は観察され得ない。の四点をあげ、それにもかかわらず内観法が用いられたのは、言語が意識的経験の忠実な反映であるとか、人間の心は本来同一であるとか、それはすべて自己観察に現われるべきであるとかの素朴な仮定が前提となっているからであると

いう。思考を一般に心的活動に置きかえれば、右の指摘は一般にあてはまるといってよいであろう。内観法によって意識乃至心理過程を分析、記述することが不十分であるのみならず、科学的方法として適切でないことは明白である。行動主義運動の意識否定は、初めは専らこの方法論上の理由であった。しかし内観法の欠陥は右の如く内観心理学自身の中からも露呈されてきていたし、コムト、モーブレイらの仏英の実証主義哲学者からも鋭く批判されていた。

動物心理の研究は内観法によらない実験的、観察的研究の成果をあげつつあったし、殊にロシアの反射学的客観的心理学はセチョーノフに続いてバプロフ、ベヒテレフによって大いなる発展の道にあった。内観法の否定は行動主義の独壇場ではなかった。寧ろワトソンは、内観法否定の時勢の上に、動物心理学の方法と原理を人間に適用することを大胆に提案したのであり、その限り、人間の意識の存在そのものを否定はしなかった。例えば

「心理学には、ヤーキスの語を用いれば、純粹に心的なものの世界が残されるのであろうか。私が心理学にとつて最善とする諸方策は、實際上意識、今日心理学者に用いられている意味での意識を無視する結果となる。この心的なるものの領域が実験的研究に開放されていることを私は實質的に否定した。現在の所、それ以上問題に深入りしたくない。必然的に形而上学にはいりこむから。もし諸君が行動主義者にも他の自然科学者が用いるのと同じ仕方得意識を用いる権利を許すなら、即ち、意識を観察の特殊な対象とすることなしにそれを用いることを許すなら、私の言わんとすることをすべて許したことになる (J. B. Watson: *Psychology as the behaviorist views it*. Psychol. Rev. 1913 20. 158-177. p. 174)。」

というワトソンの語によっても、意識を否定するのでなく内観法による特別な研究の対象とすることの非科学性を強調するだけであることが知られる。ワトソンと共に、行動主義の有力な支持者であったハンターも

「行動主義者の著作を簡単に点検するだけで彼が五感をもたない人間ではないことが確信されるだろう。彼は生きており、心理学者(内観心理学者の意—筆者註)も一般人も等しく認めている同じ事物や事件の世界に生きているこ

とき、極めて率直に承認している。だから心理学者に、その敵(行動主義者の意—筆者註)がこれらのもの存在を否定するなどといわれるには及ぶまい(W. S. Hunter: *Psychology and anthropomy*, in C. Murchison (ed), *Psychologies of 1925*, 1926. p. 89)。」

としい、ただ主観主義者(心理学者)によって意識といわれる現象が、感覚刺激とこれによって起こされた言語反応との特殊な関係又は現象と同一であることを言わんと力めてゐる(W. S. Hunter: *The problem of consciousness*, *Psychol. Rev.* 1924. 31. 1-31)。ワイスも亦、意識はわれわれの感覚、心像、感情の総体であるが、「純粹に私的な経験であり、言語其他の表示において何らかの行動の形で表出されない限り、科学的な価値乃至根拠をもたない(A. P. Weiss: *Relation between structural and behavior psychology*, *Psychol. Rev.* 1917, 34. 301-317. p. 307)」と云う。これは初期の行動主義の主張においては、前述の如く、必ずしも意識的事実あるいは意識的経験の存在を否定するのではなく、科学的な研究に於ては行動の客観的事実のみで十分であり、これらの事実に関する内観的事象は信を置き難く皮相的でもあるという、ある意味では極めて素朴な方法論に外ならない。方法論的行動主義と呼ばれるこの主張はその限りでは、心理学の客観化という方向への当然の主張であり、同時に行動主義主張が広くうけいれられるに至った理由でもあった。

しかし、この方法論的行動主義には、半面重要な問題が残る。意識的経験の存在を容認する以上、たとえそれが私的なものでも、或いは不明確なものでも、経験的事実としてあるからには、何らかの説明が必要となる。しかしそれは行動主義が唱道した「科学的」方法では追求できぬものである。このようなジレンマに於て行動主義は、所謂意識的なるもの、観念論的な語によって表現される心理的現象を、行動の語におきかえることを試みた。思考を音声言語反応及び微細な筋運動、腺活動としての内言語に還元しようとしたワトソンの試み、或いは前記のハンタアの如く意識を言語反応の刺激原過程との結合の不確定な関係として規定しようという試みなど、みなその表われとみられよう。

しかし当時のこのような試みは、測定方法の未熟未発達と急進的すぎる意欲とによって、著しく外面主義に陥り、多くの批判をうける立場に立たしめるに至った。意識的経験を表現する日常的言語を用いないで、果して人間の行動の記述や説明が可能であるか、行動主義者が行動の語でおきかえたとする観念や思考は、常識あるいは古い心理学のいうことに従っているだけで何ら新しい知識が加えられないという類の批判である。

「壇上に一人の人間が腸線を馬の尾毛でこすっている。多数の人間がものもいわず緊張して坐っていたが、やがてにわかには猛烈な喝采を始めた。行動主義者はこの奇妙な出来事をどう説明するか、腸線の振動がこの多数の人間をどう刺激して完全な沈黙と静寂に至らしめたと説明するのか、刺激の停止が狂騒的活動の刺激となった事実をどう説明するのか、音楽にききほれていた聴衆が演奏家に対する感謝と賞讃を拍手喝采に爆発させたといえれば誰にも分ることである。行動主義者にはききほれるとか賞讃とか感謝とかは無縁である。彼等は何か他の説明を求めねばならない。害はないのだから何世紀でも探させておけばよい (J. B. Watson and W. McDougall: The battle of behaviourism, 1929, p. 63)°」

「おきかえに夢中になっており、時々おきかえを説明だと思っている。行動主義のいうことを読んでみると、彼等は願望が内臓の構えであり、意味が身体的態度であり、思考が言語機構であると言うことが、説明であると思っ  
ているという印象を禁じ得ない。だがこれらの叙述で願望、意味、思考についての知識に加えられるものはあまり  
ない。それは殆んど常識や古い心理学からの引継ぎと、既知の事実に基づかないことの多い生理学的説明の企てに  
終始している (E. Heider: Seven psychologists, 1933, p. 275)°」

これらの批判に対して、行動主義の主導者たちが、意識の語を行動の語におきかえるのは説明でなくて定義であり、科学的に操作しうる方向への枠づけであり、詳細な研究は今後の発展に待つと答えれば、恐らく問題はなかったろう。しかし、彼等の答えは一挙に意識的事実の否定という急進的な方向をとった。当面自分たちの唱道する科学的方法で

直ちに追求できぬ厄介な意識の存在を承認しつつづけるよりは、一挙にこれらの事実を否定する方が簡単であったし、尖鋭的でもあった。

「意識は……見られも触れられも、嗅がれも味わわれも動かされもしない、それは古い靈魂の概念と同じように、証明し得ない平俗な仮定である。……意識を、副現象としてにせよ身体の物理的・化学的事象に挿入してくる能動力としてにせよ、意識を導入しようとする人は、觀念論的、生氣論的傾向の故にである。行動主義者はその科学の試験管の中に意識を見出すことができない。何処にも意識の流れの証拠を見ない。ウィリアム・ジェームズが記述したほど確信的なものをすら見出すことはない。しかし行動主義者は行動の絶えず拡がる流れについて確信的証拠を見出すのである (Watson and McDougall: op. cit. p. 14-16)。」

こうして極めて性急に、素朴な一元論の立場を宣言し、意識的事象に関する常用語を用いることすら、意図的に避けるという偏狭な態度を強調するに至った。

「一九二〇年代から三〇年代に、学位を得た心理学者たちにとっては、本章の表題をなす用語——(心像・記憶・注意—筆者註)——はタブーであった。今日でもある程度ではまだ多分そうであろう。われわれは職業的心理学からの追放の脅威の下に、これらの語を用いないよう、少なくとも勤務時間中は用いないよう教えられた。一般の人々の話の中では、これら或いはその同義語を用いることは差支えなかったし、実に必須であった。しかし科学の目的のためにはこれらのことばは全く不適と見做されていた (O. N. Mowrer: Learning theory and the symbolic processes, 1960, p. 163)。」

行動主義における意識否定のこの主張は、さきの方法論的行動主義に対し形而上的行動主義ともよばれる面であり、初期の行動主義に極めて素朴且急進的な印象を与えた側面であったと考えられる。方法論的行動主義の主張は科学方法論として一般に是認されるものを含み、行動主義はその基盤にたつてひろくうけいれられた。他方形而上的行動主



義は、その後継者たちのすべてに納得されたものではなかった。しかしその圧力は、右に引用したマウラーの述懐にも見られるように、アメリカの研究者へのかなり強い束縛となっていたといわれよう。意識的事象もその中に含まれる人間の心理的機能を科学的に研究するのに、検証しうる行動の客観的事実を基礎としそこから出発するという方法はそれでよい。しかし、初めから意識を無視したり、意識の存在を否定するということは、それが可能な確実な事実をわれわれが得るまでは、差控えるのが科学的態度であろう。意識的事象に関して用いられてきた概念を、行動の語におきかえることは、それは問題の一つの定式化として、研究の作業仮説であって、解決でも説明でもない。初期の行動主義主張が其の後の発展においてその内部から批判され訂正され、それ故に又科学的心理学としての進歩を来し今日重要な位置を占めるに至ったのも、この矛盾を次第に事実において明らかにし、方法的行動主義従ってそれはもはや特に行動主義と標榜する必要のない方法論上の客観性に帰一しつつあるからであるといえる。意識を否定する潮流の中に入りつつ、意識的事実をも説明しうる理論体系を、客観的に検証しうる事実の上に逐次構成しつつあるのが、現今の行動主義であるとい得よう。マウラーは前掲の語のあとに、

「勿論事態は変わりつつある。しかし、急進的行動主義が導入したその分析、研究の方法が、行動主義が無視乃至破壊さえしようとされた概念に、不可避免的に、われわれを復帰せしめつつあるということは、いささか皮肉なことである (O. H. Mowrer: op. cit. p. 163)。」

と云う。

内観方法が斥けられ、従ってそれに基づいて構成された構成心理学或いは意識心理学の体系が崩れたのは、いろいろの思潮の背景はあるとはいえ、方法論的には、ある実験的事態における言語報告と、報告された意識的事象との対応が確実でなく、又確実か否かを客観的に検証することもできないという点にあった。行動主義は言語報告という

行動のみを確実とし、意識事象との対応は無視乃至不問に附した。しかし、内観法が思考研究において最も顕著な右の欠陥を露呈したのに比し、感覚の分析、弁別など、精神物理的測定といわれる領域では、——感覚質の経験的特性を問題としない限り——感じたことの報告、あるいは感じたか否かの報告は、それが言語によるにせよ動作によるにせよ、経験の報告として比較的確実視されたのみならず、これによって重要な組織的知見がもたらされてきたことは否定できない。感覚的経験——感覚の概念は構成的なものであったが——も直接的所与として意識内容であった。思考においては対応が確実でなく、感覚においては比較的確実であるとみなすならば、問題はかかる対応の確実さを、われわれは言語報告内観そのものの確実さから得るのではなく、何らか別の基準をもって処理しているといわなければならぬ。いいかえれば、感覚の場合には、報告をチェックしうる手段をもつに對し、思考の場合には直接チェックする手段がなかったということである。あるいは、感覚においては有効であったチェックの手段が思考においては有効でなかったということである。内観心理学の混迷は対応が不確実である場合にも対応が確実であると前提したことであり、急進的行動主義の盲点は、不確実なる対応を行動的事実から排除したという点である。言語報告はその筋肉的微細運動で客観的行動であるのではなく、確実にせよ不確実にせよ、経験との対応をもつというその関係において行動的事実なのである。感覚的経験は、その報告も比較的簡単な言語乃至動作のカテゴリで表現でき、且与えらるる現存の刺激の物理的性質によってチェックが可能であった。勿論同一の刺激性質に對して常に同一の報告が対応するわけではない。しかしその報告のちらばりは無限定ではなく、夫々のカテゴリに對しある分布の傾向を示し、その限り規則的に捉えることができる。これが右に述べたチェックの可能性であり、感覚心理学の重要な知見はこれを基礎に組織的に得られたのである。感覚の報告の場合、必ずしも言語報告にのみ限られない。われわれは反射活動や動作を以て報告とみることもできた。言語をもたない動物や幼児では止むを得ないことである。しかし言語によって応答される時、最も意識的でありうる。

内観報告はそれだけをとり出しても意味がない。しかし現実の客観的存在との関係においてチェックが可能な限り、ということとは、言語、動作を含めて、人が現実との関係の中に如何にあるかを表現する限り、それ自身現実的行動に外ならない。対応が緊密であるか離散、流動的であるかということとは、夫々のありかたを示す客観的なデータであり、それによってこの事実を排除する理由になるものではない。感覚的経験は常に刺激（客観的实在）との関係の中に形成される現実的活動であり、その言語報告はこの関係を表わすものとして現実的なのである。意識的とされる経験、あるいは観念的なものを所産する活動が、現実的世界からひきはなされ、それらだけの関係の中で孤立的に考えられるとき、この現実性を失って無意味となる。内観法の欠陥は正にここにあった。同時に、この現実的關係に於て形成される現実的活動の所産としての意識を除外された人間の行動は、単なる外面的反応の集合とみなされざるを得ない。急進的な行動主義は意識心理学を排撃しながら、同じ自閉性に陥ったのである。現実的なチェックを伴わない、または伴い得ない「意識それ自身」の研究の不毛性の故に内観法を排除するならば、それに代る方法は意識過程を現実的關係の中において現実的過程たらしめることにあるべきであろう。一面的な意識の否定乃至無視は、行動を非現実化させることにならざるを得ない。ルビンシュテイン (S. L. Rubinstein: *Printsipi i puti razvitya psichologii*. 1959. 内藤耕次郎・木村正一訳 心理学上, 1961, p. 200-1) はこの事情を意識的なものの存在を自覚性と同一視する観念論的思想の同じ誤謬として指摘しているが、行動主義が採用した単純な外面主義、即ち刺激-反応の結合という極度に単純化された形式は、その機械的連合論と相俟って、生活体の際だった特徴である有機的統合的な機能を無視する危険に、自らを置いたのである。

言語報告は何かについての言語表現であり、運動動作は有機体の何らかの状態の表現である。「何らか」とは有機体と外界との現実的關係である。更に重要なことは、斯る言語、動作はそれが現実的過程としてこの関係を変化させ

る。外面的な刺激と反応との対応は、このような現実関係の中において、行動として意味をもつ。行動主義が、客観的に観察測定できる外部的刺激、反応の対応を——その限り断節的ではあるが——立論の基礎データとした基本的態度には、科学方法として誤りはなく、実験的検証を必要とするならば現実の中からある部分的対応のみを孤立化させることも止むを得なかった方法である。そして実際この方法によって行動主義が、確実に、断節的ではあるが根拠ある実験的知見を積上げてきた貢献は、極めて大きい。行動主義の理論は、斯る実験的知見に基づいて刺激と反応との結合を支配する何らかの基本的な連合法則を確立し、これによって学習による行動変化を説明しようとするにあった。従って学習がそれから推論される行動変化における刺激—反応対応は、できるだけ複雑な現実的關係にあるものを避けて、少なくとも外面的にでも単純なものが選ばれた。それによって理論の単純化が期待されたのである。しかし単純な行動と複雑な行動との違いは、単にそこに含まれる反応の構成だけの問題ではなく、反応が行動として意味をもつ現実的なありかたの相違であるとすれば、刺激事態即ち世界が有機体に如何なるものとして彫琢され、最終的反應が有機体と世界との關係に如何なる意味をもつものとして遂行されるかという、刺激—反応を媒介するしかたにある。有機体が進化、分化するほど、この媒介に依存する程度が大になり、単純な行動理論がそのまま適用されるか否か甚だ疑問である。行動主義者の努力は、これをななるべく単純な理論で一貫せしめようというにあった。しかし、刺激—反応の対応關係は、それほど簡単でなく、多義的であり一貫性に乏しい、外面的対応關係を説明するためには、これを媒介する内的關係、末梢的対応を媒介する中枢的機能について、何らかの概念を導入するでなければ、刺激—反応の外面的対応についてもその關係を知ることが困難である事情が、行動主義的研究の中から次第に明らかになってきたといえる。しかもこのような媒介的過程は、有機体と世界との關係のありかた例えば外界からの信号に對しどれだけ精密正確に反応するかを示すものとして、所謂有機体の意識状態或いは意識水準に密接に關係している。睡眠中は低下し覚醒時には鋭敏である。そしてこの睡眠覚醒その移行水準の決定に網様体賦活系の重要さが確認され、覚醒

と睡眠との生物学的意義が再認識されると、意識は副現象どころか極めて現実的な生物学的状態であり、これを無視する理論体系は頗る非現実的な自閉的なものとみなされざるを得ない。勿論覚醒と意識とが正確に対応するとはいわれないけれども、覚醒的意識水準において生物学的に最も知的な行動の遂行がありうるということは、媒介的過程と意識との密接な関係を示唆する。意識的行動とはすぐれて媒介的行動であるという想定も可能であり、媒介概念の導入によって行動主義の自閉性からの脱却も方向づけられるのではなからうか。

同一の刺激にある反応の生起が訓練されれば、その刺激はその反応を生起する。逆にいえばある反応の生起は以前に訓練された刺激に対してである。これが最も単純な刺激—反応対応に対する想定である。しかし実際にはそうでない場合が多い。訓練した刺激が反応を生起しない場合（例えば条件づけにおける消去、忘却）もあれば、訓練しない刺激に反応が生じる場合（例えば刺激汎化、偶発学習）もある。寧ろ現実過程の中では、このような事実の方が多い。行動主義の諸理論は、いわば前者の前提にたちつつ後者の事実を如何に和解するか苦心である。訓練そのものが何であるか人によって意見が違うのであるから、その議論は統一しない。しかし訓練によって刺激—反応の対応が固定するのは、ソンドンイクが考えたように、特定の刺激と特定の反応の結合が単純に強まることだといえないことは、間歇的補強の方が消去抵抗が強いという所謂ハンフレイズ・スキナア効果からもしられる。九六回の光の提示毎に眼球に空気を吹きつけられた被験者群と、九六回中分散的に四八回しか吹きつけられなかった被験者群とでは、条件づけは同じ程度でできたのに、消去抵抗は後者の方がはるかに大きかった (L. G. Humphreys: The effect of random alternation of reinforcement on the acquisition and extinction of conditioned eye lid reactions. *J. exp. Psychol.* 1939, 25, 141-158)。この種の事実はスキナア箱でのネズミのバー押しでも確かめられており、いろいろな解釈（二次強化、弁別、フラストレーション等）が下されているけれども、とにかく刺激—反応統合が強化数の函数であるという学習説

の論理には合わないわけである。この訓練（条件づけ過程）では、強化と非強化が加算的に効果をもつのでなく、強化と非強化との関係が効果をもつたのである。完全補強の場合には、強化を伴わぬテスト事態は、別個の事態であるのに対し、間歇補強の場合には、テスト事態も尚訓練事態の継続の中にありうる。事態の類同性の相違がここで問題になってくるであろう。同様に、訓練した刺激、訓練しない刺激というも、孤立的に取扱うことは誤りに導き易い。条件づけ、或いは訓練過程において常に見られる現象は、汎化の現象である。ある刺激に条件づけると、類似の刺激にも反応が生じる。このことは、かかる訓練そのものが、特定の刺激に対し特定の反応を個々に結合するのではなく、いわば一種の推論的過程にも比せられるべきことを示すのであろう。「一度あれば次も次も、……そしていつも」「これであればあれもあれも……そしてどれも」という形式を含む。勿論一次的汎化とよばれるこれらの過程は、時間的接続、刺激的類似に強く制約され、汎化曲線のデータが示すようにその拡がりは著しく狭い。しかし訓練とはもともととこのようにある程度の幅をもってなされ、それ故にその効果が、即ち移入効果が予備せられているものである。しかし汎化が行きすぎれば訓練の現実的效果、即ち機能的意味を失なう。従って訓練が現実的であるためには、汎化と同時にその修正を伴わなければならない。消去、弁別はかかる修正を意味する。強化、非強化、訓練した刺激、訓練しない刺激などという実験手段としての操作的用語は、有機体が直面する現実的事態の中でどのような汎化修正の問題関係として関連するかということによって、初めて訓練としての機能的意味をもつのである。スキナーが強化についての特定の理論からの演繹を避けて、専ら強化、非強化のスケジュールの変化からそこに何が起るかを見ようとした態度は、この意味で寧ろ正しいといわなければならない。消去、修正を伴わない訓練スケジュールはむしろ極めて特殊な現実事態である。この特殊事態を一般的基本的なものとして前提し、これからすべてを推そうとするとき、多くのパラドキシカルな事実遭遇するのは当然ではあるまいか。修正は訓練の効果を成立せしめる媒介であり、われわれが訓練効果を検するために用いるテスト事態への移入は、両事態間の類似性が媒介する。既に単純な行動におい

てもこの意味で媒介の原初的な形式は含蓄されているのである。強化と非強化、訓練刺激と非訓練刺激は、媒介されることによって現実的連関の中に機能する。

潜在学習の事実、学習には強化が不可欠とする立場に不利であり、事態への熟知が記号—ゲシタルト期待を成立させるというトルマンの認知的立場の有力な支持となった。そして事実、ネズミでも、単に迷路を走行するとか、迷路の上を蔽ったガラスの上を走行するとかの前経験をもつだけで、同じ迷路での学習成績がよいという実験的事実も *see* (G. W. Hayney The effect of familiarity on maze performance of albino rats. Univ. Calif. Psychol. 1932. 4. 319-333. J. P. Seward: An experimental analysis of latent learning. J. exp. Psychol. 1949. 39. 177-186. 三谷寛一・本吉良治: Hebb の enclosed field maze における潜在学習について日本心理学会二七回論文集 1963. p. 272)。しかし、ネズミのような動物では、この認知的効果を余りに過大視はできない。トルマン自身も述べているように、ある事態で成立させた記号—ゲシタルトは、その意味づけの異なる事態では効果をもたなかった (E. C. Tolman: Sign-gestalt or conditioned reflex? Psychol. Rev. 1933. 40. 246-255)。これらの動物では、最終的な目的反応における顕著な運動成分或いはその自己受容刺激のきわだちが重要なことはミラー (N. E. Miller: A reply to "Sign-gestalt or conditioned reflex? Psychol. Rev. 1935. 42. 280-292) の所論及び実験にもみられるし、又状況の弁別性のきわだちの重要なことは、トルマンとブライトマンや、シマフォードの実験の示す所である (E. C. Tolman & H. Gleitman: Studies in learning and motivation: I. J. exp. Psychol. 1949. 39. 810-819. J. P. Seward: op. cit.)。潜在学習、潜在消去の生起は種々の制約の下であるけれども、特別な強化や弁別訓練をすることなしに一つの事態が他の事態に媒介されることを示し、しかもこの媒介性は、必要な時即ち要求に即して事態の中に作用することを示している。そしてこの媒介者は両事態を相似たらしめる手がかりともいふべきで、状況あるいは反応運動におけるきわだちた刺激であるが、そのきわだちは必ずしも客観的ではなく動物によってきめられる、その意味で主観的ともいえよう。外からの刺激にせよ内からの刺

激にせよ、それがきわだってある事態における強化と共に経験されれば、それ自身は特別に強化せられることなく新しい事態の中において以前の事態に類同化させる働きをもつ。訓練事態とテスト事態とを連関させるものはこの媒介性であり、恐らく訓練を成就させるものも、個々の試行間のこの媒介性であろう。

媒介刺激のきわだちは、外的状況に於てにせよ反応運動においてにせよ、本来主体自身によって与えられるものである。実験的状况においては特に刺激のきわだち性を被験体ではなく実験者の統制によって導入されていることが多いので、この媒介性が被験体の活動として捉えられることが少ない。しかし現前状況の中に関係手がかりがないにも拘わらず、動物がそこで過去と関連ある行動を行なうならば、被験体自身による媒介が予想されねばならぬ、遅延反応、遅延交替、観察学習などの事實は、こうした「主観的」媒介の存在を証するものであろう。顕在的、潜在的運動反応で説明することの不備なことはオスグッドも指摘している通りである（C. E. Osgood: *Method and theory in experimental psychology*, 1953, p. 663）。ハンター（W. S. Hunter: *The symbolic process*. Psychol. Rev. 1924. 31. 478-497）以来、行動主義における象徴過程、或いは *representation* の問題は、このような媒介を如何に解釈するかにかかっており、それを人間の言語的象徴機能にまで如何に敷衍するかにあった。ハル、ミラード、オスグッド、マウラフ、スターツらの名がこの路線においてあげられるであろう。これら行動主義における象徴過程についての諸説及びその展開については、別に稿を更めて論考したく、ここにその余裕をもたないが、その最も一貫した特徴は、言語的象徴を、反応から誘導される刺激の代理的意味づけ、即ちひろく記号化といわれる過程に還元しようとする傾向である。オスグッドの媒介過程説に最もよく代表されるこの傾向は、記号が如何にして事物や事件を代表する機能をもつに至るか、言語的象徴が基本においてこの媒介的記号化と同一の性質で考えられるかという点に、一応の行動主義的図式を与えているものと見られている。オスグッドにおいてはハルの予期的部分目標反応にも相当する反応の部分的成分が、かかる記号性の成立の基本として重視されているのに対し、マウラフは寧ろ斯る媒介の基本には感情に基づく二



次強化を重視し、オスグッドが基本とした右の記号性はこの感情に条件づけられた環境の媒介刺激であるとみるように、何を記号化の行動的基本とするかは異論があるけれども、こうした媒介が、行動の現時的刺激に対する反応性という固定形式からの遊離を可能にし、抽象化された個別的状態へのかかわりを可能ならしめるとする点で共通であり、条件反応、予期反応、遅延反応、交替反応などを通じてみられる *representative factor* を説明しうるものとする。動物の水準における思考的行動もこの記号的媒介性の導入によって、説明の可能性の範囲が著しく増した。言語的象徴も、言語のもつ歴史的社会的な体系性は別としてその行動的機能で捉えれば、基本においてはこれに帰せられ、ただ記号が一般に事物あるいは事態に対して指示的呈示的に機能し、記号と指示されるものとの関係を共通の潜在的反応、刺激のフィードバックが媒介するのに対し、象徴においては共通の媒介過程、即ち概念的特性が媒介者になるとする。しかし *representation* が単なる代理ではなく、斯る代理者による現実への対応が、具体的事物への対応よりもより精密により広汎に、且つ可変的組織的でありうるのは、記号化による代理的な行動の受動的な促進（汎化）禁止（分化）だけでなく、能動的なその使用によって、極めて高次の展開をなすといえよう。象徴におけるこの能動的な道具性は、象徴が単に個物を代表せず概念を代表するだけでなく、個体的記号を越えたより普遍的特性で現実のテストに指向される点にある（H. Werner and B. Kaplan: *Symbolic Formation*, 1963. 矢田部達郎 心理学序説の所論も略々この点を強調するとみられる）。意識といわれる機能においてこの象徴的道具性は能動的に駆使され、認知的事物をより普遍化される構造に体制化し、現実が如何なる関係の中において現前するかをテスト可能ならしめるものであろう。この意味で、行動主義が意識を回避しつづけることは行動の理解を閉じた系に限定し、真に人間の活動の重要な側面を看過せしめるといえよう。*representation* が開いた系であるという点に、行動主義が今後如何に意識の問題と対決して行かねばならぬかの課題がある。

（了）

## The Problem of Consciousness in Behavioristic Psychology

*by* Taro Sonohara

For all substantial contributions to the progress of modern psychology, behavioristic approaches are now confronted with another difficulty how they can be reconciled with the problem of consciousness. Physiologists as well as neurosurgeons who are working on the physical correlates of consciousness are beginning to express some perplexity at the negative attitudes of behavior psychologists toward consciousness. In fact, conscious states or conscious processes are now increasingly recognized as real objective events, without which finer elaboration in and appropriate reaction to signals from the external world would be lost in a more differentiated organism. Old radical behaviorists tried to translate mentalistic terms about conscious happenings into behavioristic terms of overt and covert responses, but no behaviorists would to-day rest content with such a pure verbal translation. In the current behaviorist camp, various ingenious speculations or theories are now in development concerning to the mediating processes, the essentials of which are observed to be symbolic or representational functions of a fractional goal response or response-produced-sign stimuli. The efforts seem to lie in the hope that the entire conceptual machinery which had been previously developed to account for the build-up of external response strength could be applied to symbolic responses, the very essential features of conscious verbal behavior, by reducing symbols to signs. Behaviorists have been accustomed to regard verbal responses in physical sequences as more objective than the contents reported. But the objectivity of verbal responses should be considered to lie in their symbolic involvements, so far as they reveal the real interrelations between subjects and environment (external and internal). Contents reported, thus checked in the real relationships, are more objective in psychological sense than the mere muscular movements or sounds. Words and sentences are not symbolic in the sense they only substitute some concrete objects or sequences of objects, but they are symbolic in so far as they are

used to represent the very actual experiences of the subject to some real situation. By this representation one sets oneself in new relation to reality. Thus the symbol should be taken as an instrument that makes realization of reality in individual. In this sense the symbolic is the essential of consciousness. Reducing symbols to mere signs is not prospective strategy to reconcile with the problem of consciousness for behaviorism. Consciousness or symbolic process should be looked and studied in its positive side. The approachment would be expected, in my opinion, in the re-examination of S-R as well as S-S processes in their reality-checking characteristics, as reflecting the internal relationships of problem situations between an organism and external world.

### **‘Self’ in its Bearing on the Good**

*by* Mitsuo Moriguchi

There is a sense in which to say ‘everybody is an egotist’ should be a sheer platitude, indeed. And to say ‘values of things measured in an ego-centric perspective are necessarily biassed’ may also be an age-old truism. But the actual fact we now witness and live through, seems to be the paradoxical one that the unprecedented self-righteousness among all of us, individual as well as collective, prevails hand-in-hand with radical relativism apparent in every facet of the human life to-day. This may well occasion us to ask whether or not there be any essential bearing of *self* on the intrinsically or unconditionally good.

The first thing here to be said is that the self and the good, properly understood, are by nature inseparable and somehow complementary. To the extent that selves claim to have the right to exist at the sacrifice of all others or of the whole world (which is more or less implied by anyone’s armament with H-Bomb), the intrinsically good cannot but be in eclipse, not only for those human selves who pretend to be the sole good, but also for the inhabitable world as threatened to be annihilated. The anxiety for survival necessarily produces wholesale relativism in respect of cultures,